



名古屋から鳥取へ
2026年五感で心をほく夏号

心ぼどける 夏の鳥取リトリート

自然、歴史、食、温泉といった観光資源は目移りするほど。旅慣れた人からも支持される鳥取県ですが、特に夏は、行き先がどこであっても涼やかで爽快です。そんな本来はアクティブに過ごしたい季節に、ゆっくり心身を休ませる視点を持って楽しむ。題して、夏の鳥取リトリート。

企画・制作／中日新聞メディアビジネス局

名峰をゆったり眺め、ふもとの清流へ

日常から意識的に距離を置いて心身を癒やし、自分と向き合う時間を過ごす「リトリート」が、新しい旅のスタイルとして注目されています。従来の旅行ほど観光やアクティビティを詰め込むのではなく、あえて立ち止まって目の前の光景を楽しみ、その中で出合う東の間の情景を心に焼き付ける。今回訪れた鳥取県西部も、そんなぜいたくなひとときを過ごすことができる場所です。

かつて鳥取県の中部とともに「伯耆国（ほうきのくに）」と言われていた県西部。今も「伯耆」と付く地名や旧跡が多く残り、秀峰・大山（だいせん）の西側から見た独立峰の山容を、地元では「伯耆（ほうぎ）富士」と呼んでいます。形を変える夏の雲が影を落とし、山肌を覆う緑は、なお鮮やか。裾野で草をはむ牛たちの姿に心がほぐれます。牧場主の大山乳業農業協同組合が運営する「大山まきば みるくの里」で、名物のソフトクリームを味わうのも忘れずに。また、北側の通称・北壁は打って変わり、約2kmに渡る急峻な断崖。こちらは空を押し上げるような大観が、リフレッシュ効果を高めてくれます。

リトリートで大山を訪れるなら、南側山麓「奥大山」の木谷沢溪流（日野郡江府町）にも足を運んでみましょう。大山の天然水を育むブナ林に囲まれた清流へは、県道沿いの入り口のあたる散策道から向かいます。歩くこと数分、沢のせせらぎに重なるコケの匂いや、木漏れ日を揺らす風。時間を忘れて身を置きたい空間です。

温泉のち、街歩きと名物堪能

県西部を代表する温泉地といえ、山陰地方最大級の皆生（かいか）いけ温泉。多彩な湯宿が軒を連ねる中、「松涛園」はペット（犬）同伴で泊まれる旅館です。館内はリードを着けて、一緒に歩くことができ、夕食のbuffetでは犬用の鶏肉料理も用意。貸切露天風呂は犬も入浴可能です。同館の福島利幸さんは「愛犬にも癒しのひとときを」と呼び掛けます。

自分のペースで過ごすリトリートには街歩きも欠かせません。そこで、JR米子駅の西に広がる旧城下町地域。観光ガイドの川越博行さんによると江戸時代から昭和初期の町家が600棟ほど

残っているそうで、このうち駄菓子店「岡本一銭屋」は明治時代から営業しています。「飴玉も玩具も一銭だったころの愛称が、そのまま屋号になったのよ」とほほ笑むのは、90歳を迎える店主の岡本小芳（こよし）さん。直径1mの一銭銅貨の看板は必見です。

この界限には飲食店も点在しています。「ながた茶店」はお茶と茶道具の専門店ながら、名物の「475（よなご）パフェ」を提供するカフェを併設。鳥取県産食材を使い、米子城を想起させる五層仕立てが条件のご当地パフェを、同店では大山町産のとうとり茶をふんだんに使った逸品に仕上げました。とっとり茶の豊かな香りに、心も一層落ち着きます。

景色に感動し、匂いが記憶に残り、耳に届く音が思い出になる。そんな鳥取リトリートへ、この夏出かけてみませんか。



1.大山の西側（伯耆大山）の麓。牧歌的な風景が広がる。
2.木谷沢溪流。散策道の入り口付近には駐車場もある。
3.享和元年（1801年）創業の「ながた茶店」の475パフェは1,600円。土日祝のみ1日10食限定。4.「大山まきば みるくの里」でソフトクリーム（500円）を買う丸田さん親子は広島から来たそう。5.「松涛園」には室内ドッグランもある。6.木型を銅板で包んだ一銭銅貨の看板が目を引く「岡本一銭屋」



鳥取県名古屋代表部 名古屋市中区栄4-1-1 中日ビル5階
TEL.052-262-5411
https://www.pref.tottori.lg.jp/nagoya/

鳥取県の観光情報は
こちらから



7/17(金)・18(土)に中日ビル5階で
鳥取県の特産品を販売します!!
山形県・石川県とともに「3県合同販売会」を行います。鳥取県からは「打吹公園だんご」「砂丘らっきょう漬け」「ねばりっこ（長芋）」など、おいしい特産品・加工品がラインアップ。ぜひ足を運んでみて。